
Mistake!

水谷元行

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s t a k e !

【Nコード】

N 3 7 5 1 F

【作者名】

水谷元行

【あらすじ】

駅の階段で激しくぶつかった二人はそのまま地面に激しく頭をぶつけてしまう…病院で意識を取り戻した二人は入れ替わってしまった事に気づいて…

M t o F (前書き)

少しセクシャルな内容を含ませる予定…

M t o F

俺は遅刻しそうになって駅の階段を猛ダッシュしていた…

私は大学のゼミに遅れ、階段へ向かって走っていた…

学ランを来た少年と大学生風の女性が、階段の最上段でぶつかって階段から二人とも落ちたんですよ、

私は、改札機室から見ていてかなり危険な落ち方をされているように見たんです。

急いで階段まで行くと二人は丁度一番下まで転がり落ちて、学生さんが下、女性がその上に仰向けに積み重なるように倒れていました。近づいて見ましたら全く意識が無く、直ちにに救急車を呼ぶよう階段をかけ降りてくる同僚に依頼しました…

以上、駅員の社内報告

少年は階段から落ち地面に激しく後頭部を打ち付けた直後、一緒に落ちてきた女性の後頭部を激しく前頭部にぶつけた模様ですね…ただ、女性の方もかなり激しく頭を打ったようですね…

以上、駆けつけた救急隊員の報告
ズキッ！

『うつ、頭いた…』

ゆっくり目を開く…

なんだ？ここ？

真っ白い天井にシルバーのカーテンレール、カーテンレールには上30cmくらいが網になってるカーテンが吊ってある…

誰がいる…

女性？白衣？でもナースっぽくない女医者か？

「西島さーん？西島結衣さーん？聞こえますかー？」

『え？何言ってるんだよ？俺は沢井達だよ？何で女の名前で呼ばれんだよ？』

「沢井ですよ?!」

俺は耳を疑った。

確かに喋ったのは俺なのに女の人の声で聞こえる…

「何を仰ってるんですか？西島さん？落ち着いて下さい。
ここは病院ですよ？解りますか？」

あつ、そうか駅で階段から落ちたんだ俺！

「あの…一緒に落ちた人は…？」

？あれ？声がヤツパリ声がおかしい…

「大丈夫ですよ。」

彼もかなり強く頭を打っていますが、あなた同様、脳に異常もないし、ただあなたをかばって落ちたから

まだ隣で眠ってるわ…

ではまた来ますからね。」

「多分ショックによる一時的な記憶の混乱ね……」とナースと話しながら病室を出て行った…

俺は中学一年の時に両親が事故で死んでから学校の寮に住んでいた。親戚も居なくて、祖父祖母も居なかった俺は天涯孤独って奴になったが、

たまたま俺の通っていた学校が親友の祖父が学園長で寮に住まわし

てくれ、身の回りの面倒を見てくれた。親友も今までと変わらずいてくれた…

そんな事をぼやっと思いついた…

意識を切り替え、ふと体を起こした…

何か距離感がおかしい、いつもと違う違和感がある…

頭を打ったせいかな…

部屋の隅に洗面台がある

立って近づき、水を出す、手にすくってそのまま飲む、その勢いで顔を洗う…

つってあったタオルで顔を拭き目の前の鏡を何気なく見ると…

……？

………??

………???

………！！！！

「なっ…？なんじゃあ？こりゃ…？」と白ジーンパンの刑事のような言葉が本当に自然と口をついてでた。

思わず、顔を触る。

手を見る。

女の人だよこれ！

胸に手をやる。

やっ、柔らかい膨らみが2つある…！！

「ええ！？」

手術着の上から股間を押さえる…

なっない…

「おつ俺…女になつて…？」

振り返ると俺が今まで眠っていたベッドの横にカーテンで区切られたもう一つのベッド

カーテンを引き、眠っている人確かめる…

男だ、

布団をめくるとなんとそこには俺が眠っていた…

まさか…

俺は俺に(？)

呼びかけた

「おい！ちよつと起きろよ！ちよつと起きろつて」

すると、そこに眠っている俺(？)

は目を覚ました…

F t o M (前書き)

M t o F や F t o M は本来異性化を望む方の意味

「男性から女性へもしくは女性から男性へ」

ですが、ここでは「異性に成っていた」と言う意味です。

F t o M

「…きろ…起きろよ…」

あれ…誰かが呼んでる…女性…
私？

しつかり目を開ける。
間違いない。

私を覗き込んでいるのは私…

まさか、幽体離脱？

いや、まさかね…だったら離れた体の方が立っているなんておかしいもの…

「もしかして、西島さんって…」

「はい…西島ですが…」

あれ…？風邪でも引いたかしら？
立っている私は何か考えると辺りを見回し、何処からか鏡を持ってきた…

「あの…多分びっくりすると思うんだ、俺自身だってかなりびっくりしてる…」

と言って鏡を差し出す…
受け取った私は鏡を覗き込む…

誰？

結構可愛い男の子ね…

ちょっと良いかも…

？

………？

！

………！！！！

「わっ私？」

男の子になってる？顔を見上げる…

「俺…沢井達つて言います。

高一です…」

私の顔が男の子の言葉を話す…

「私、西島結衣…大学三回生…」

あつ、そうそう私駅の階段で男の子とぶつかって彼、私を庇おうとして一緒に落ちたんだ、

「あの、落ちる直前私を庇ってくれたよね…？ありがとう…」
すると目の前の私…達つ、

達くんは照れながら

「いやあ、でも結局、落つこちちゃったし、慌ててたもんだから…
あつても、これからどうしたら良いんだろ…？」

困惑する私の顔…

じゃなかった達くん…

私も同様に、

「そうよね…」

私…じゃなかった達くんは

「そついえば誰も来ないみたいだけど？面会…」

ああ…

「私さあ、中学生の時に両親が事故で死んじゃって、親戚もいなかったし、お爺ちゃん、お婆ちゃんもいなかったから、友達のに居ることになったの
今は一人暮らしだから…」

私の顔の達くんは…

「俺と同じだ…」

聞くと彼同じ境遇で寮に住んでいる…

でも…どうしようこれから…

コンコン、とノックする音が聞こえパニクる私達…

「とつとにかく今は黙ってよう!」

「そ!そうですね…!」

短時間で相談して…

ガラガラ、

「結衣ちゃん!大丈夫?」

小夜とおじさんたちが来てくれた…

向かっていくのは当然、

「結衣ちゃん大丈夫?」

私の体の所…

「あつだつ大丈夫…」少し、戸惑いながらも返す…達くん

小夜のお母さんが、私に

「あなた沢井達君ね?

が階段から落ちた時に結衣ちゃんを庇ってくれたんですって?ありがとう」

私も

「いつ、いや！結局ちゃんと助けられなかったでっし…
一緒に病院「ここ」ですから…
申し訳ありません…」

すると小夜のお父さんが、

「いやあ、さつき聞いて驚いたが、もし沢井君が居なくて結衣ちゃん一人で、あの勢いで落ちていたら死んでいたかも知れないと医者聞かされた、本当にありがとう」

「でも…」

「何だか君結衣ちゃんそっくりね!？」

「ははははっ」

笑う小夜のお父さんたち

「じゃ、私達は事務整理に行くから」
と小夜を残して行ってしまった…

病院特有の釣りドアが音もなく閉まる
小夜はじーっと私達二人を見て

「あなたは結衣じゃ無いわね？」

と私の体の方を指差した。

私はとつさに答えた

「何で分かったの？」

小夜は私の方に向き直って

「あんた、私を誰だと思ってるのよ？」

私は

「秋桜院小夜」と答えた。

「ほらやつぱり、あんたじゃなかったらそんな答えた方しないわ」と達くんが

「え？しゅ…？」

上手く聞き取れなかったようだ。

小夜は

「私、秋桜院小夜「シュウオウインサヨ」宜しくイケメンくん…あつ、今は結衣の中何だよね…？
ごめん」

ぺろつと舌を出した。

すると、

コンコン！

また誰か来た。「はい？」

するとあまり音が鳴らないはずの病院の釣りドアを激しくドカツと鳴らして飛び込んで来た高校生。こっちはイケメンメガネ男子…

「達「タツ」！」

タツ？

「何だよ？騒がしいな？」

と反射的に答える私の体。

はつと口をふざぎ、

「ごめんなさい…」

「タツ？お前タツなわけ?!」

「あついや違つ」

慌てふためく達くん

「その慌て方タツそのものだな…どついう事だよ？」

こんな美人と入れ替わってるなんて…」

「俺が知りたいよ…まあ相手が美人なのは確かに認めるけど…後、タツは止めれ…」

私は

「そんなあ」と両手を抑えて顔を赤らめる…

すかさず小夜が…

「今はイケメンだけどね？」

あつ、そうだった…

小夜は

「良かったわね結衣、イケメンパラダイスね明日から
私は少し考えて…」

「待つて…今の私じゃあ…BLじゃない！？BL！」

個人生活統括局（前書き）

今回は艶度低いですが…しかし、次回から艶度up

個人生活統括局

さつき、女医の先生が来て精密検査のためにもう一泊する事になった。

「そう言えば、そのメガネイケメンくん？君は？」
と小夜がメガネ男子にきいた。

「そんな呼ばれ方をしたのは初めてですよ・・・
大道寺流一「ダイドウジリュウイチ」と言います
して、宜しければお嬢様のお名前をお伺いしたい」
と胸に手を当て、英国紳士のように礼をした。

小夜さんも

「これは失礼いたしました。

私、秋桜院「シュウオウイン」小夜と申します」

結衣さんが、俺の冷めた声を使って

「小夜お？変な芝居は他所でやって？」

俺も、結衣さんの冷めた声で

「リュウ・・・お前もだよ・・・」

小夜さんがやさしいから乗ってくれたけどね・・・」

すると結衣さんが、

「あはは、達くん、そんなんじゃないよ

小夜も同じ系列の人間なのよ。」

小夜さんは不敵に笑ったが、表情を鋭くして、

「なんて冗談やってる場合じゃないわホント・・・」

りゅうも同調して、

「そうだな・・・隠し続けるのも無理があるしなあ」

「学校とかどうしたら・・・？」

「多分、医者に言っても信用してはくれないだろうな・・・」コン
コン、

あれ？もう誰も来ないはずなのに・・・？

「はい？」とリュウがドアを開けるとそこには二人の
SPのような黒ネクタイ黒スーツと言う病院では敬遠される格好で
現れた

背の高い男性と小柄な女性の二人が立っていた。

リュウは

「どなたですか？」

女性が応える

「私ども、こう言う物です」

と懷から警察のように身分証を見せた

「？俺はこんな所知らないぞ？」

そこには、《個人生活統括局》とある。

リュウは「どこのモンだ？国の組織ではないな？」

「国の組織ではないわ、そうねあなた達人の生死にを統括して
います」

「とにかくお話を」と後ろの男が言うので、
迎え入れると、

女性のほうが「まず、沢井達の肉体の中にいる西島結衣さん、そし

て」

男性のほうで、「西島結衣さんの肉体の中にいる沢井達さん」

女性「これは我々の責任です大変申しはけません」

小夜さんが聞く「それはどう言う事？」

「すなわち産まれた時から死ぬまでの皆さんの人生を記録し、アカシックレコードと言うデータバンクに記録する機関です。」

するとリュウが

「アカシックレコード・・・、

聞いたことがある、そこにはこの世のどんな些細なことも記録されていると言う空想上のデータバンクで

たしか一部がインドにあるって聞いたことがある」

「長々と説明ありがとうございます」

頼むからそっち方向の返事はやめてください・・・

「そのA・レコードに記録ミスをしてしまって・・・

同じ時間軸、同じ空間座標上に同じ状況で死亡するとお二人の欄に間違って記録されてしまって・・・」

俺は

「あの・・・良く分からないんですけど？」

女性は付け加えた

「まず、西島さんの場合、

地球時間軸日本基準で

西暦2008年10月15日水曜日7時43分26秒に
北海道千夜田駅西口の階段から転落、

3秒で地面に後頭部を強打して死亡

これが沢井さんの欄にも書かれてしまいました」

「それが何で入れ替わりになるんですか？」
男性が説明する

「人は魂は頭部から抜けますが、
額から出るか、後頭部からでるかの
二通りがあります

お二人が転倒された際、恐らく沢井さんは額から
西島さんは後頭部から魂が抜けたものと思われます
この時、魂は新しい肉体へいくわけですが、
我々の方で分かっているのはこの時、本来
一番近い子宮へ向かいますが、
今回の場合、飛び出した瞬間、別の肉体
しかも、着床可能な状態の互いの肉体に
着床してしまっただようです」

リュウは

「って事はまさか・・・？」

女性は「そうです。

お二人は今や生まれ変わった
も同然なんです。

即ち、元には戻れません」

俺は正に青天の霹靂と言う奴を感じた…
結衣さんもどうやら同じようだ…

女性が続ける

「そして心配されている今後の生活ですが、幸い同じような」俺は正に青天の霹靂と言う奴を感じた…
結衣さんもうやら同じようだ…

女性が続ける

「そして心配されている今後の生活ですが、幸い同じような精神交代の事例が過去に七件、うち三件が男女の交代で、他の年齢差のある事例と組み合わせた対策案が…」

どこからか、めちゃくちゃな厚さのプリントの束を取り出した。
表紙に

【精神交代の対応に付いて】とある

「これと呼んでも長いだけで訳分らないと思いますのでかいつまんで説明します…」

俺は慌てて静止した。

「まっ、待つてよいきなり沢山言われても困るよ」

「簡単に言います

あなた方は一生その姿のままです。

学校は単位が行かなくても卒業資格を得れるようにこちらでしておきますしかし、こちらで出来る事は以上です。」

達くんの××、私が変わりにさせて貰うね…（前書き）

15禁としていますが内容は今回書いていくうちに結構エロくなっちゃいました…

何せ今回はふたりの×××がメインです…

しかし、今の所、全体的に所々、セクシャルの入った、

トランスセクシャルラブストーリーになる『予定』です…

達くん××、私が変わりにさせて貰うね…

退院して、俺はとりあえず寮に戻った…

部屋をかたずける…もうここには居られないだろうと考えていた…

ピンポン…

？

何も考えず、

「はい？」と答え玄関を見ると

「はぁい」

そこには結衣さんがいた。

「ねえ？私、提案があるんだけど…

荷造り？丁度いいわ…」

俺は次の発言に耳を疑った。

「一緒に住まない？」

「え？」

手が止まる俺…

すると後ろから抱きすくめられる…

「あたし、あなたと離れられない…

達くんもそうでしょ…？」

もうだめ…

欲望は完全に肉体に支配されてるみたい…
他の女性にはは理性が邪魔するけど…

あたしの体だから、自由にして良いと思うのかしら…？

「「犯したい…」」

「良いわよね…」

達くんを押し倒して、ブラウスのボタンを外して、ブラのホックを外して押し上げる…

形の良い胸がフルンと露われる、私の中の何かを掻き立てる…

あたしの胸って、男の目から見たらスゴくきれい…

ピンク色の乳首に舌を這わせる

「んっ、」

達くんは頬を赤く染め、唇を震わせる…

「あの…俺…その…初めてなんです…」

私は口を勃起した乳首から外して、

「初めて…？」じゃあ…

「あたしが、もらってあげるわ…」

あなたの童貞…」しかし、達くんはこう応えた…

「俺…今…女です…」

あつ、そうだった…じゃあ私の目の前に居るのは経験の無い否処女…

私は目を細めて、

「じゃあ、あなたの初体験…

って事で…ね…？」私は震える唇に舌を差し込んだ

右手は胸の立つてるピンク色を優しく指先で転がしつつ、左手で腹部から徐々に下る…

？…あれ？

「ねえ？達くんスカートは？」

ジーンズじゃ、脱がしにくいわ…

「なんとなく慣れなくて…」

私はジーンズに両手を掛ける…

達くんは反射的に腰をよじり、イヤイヤをする…

どうやら欲求や体で覚えた事は、肉体からでるみたい…

「私じゃ嫌？」ここは少しズルいけど女を使うわ…

「……………」

達くんは頬をさらに赤くして拒むのを止めた…

男物のジーンズだったから脱がせば意外に簡単だった

ショーツはそのままだったから今度は耳裏を責めつつ、左手を胸、右手をショーツに滑らせる…

自分の躰、

どこが『イイ』かはまさに手に取るようにわかるわ…

すると達くんは私の来ていた制服のズボンのベルトを外し、ファスナーを下げて中からボタンとホックを外した。

「器用ね？」

「自分が着てた制服だからね…」

「やっぱり身体優先なのかな？身体欲は…」

達くん両手でボクサーブリーフの腰を掴んで一気に引き下げる…

「自分が着てたからね…どう脱がせば早いか分かるよ

早く結衣さんがアソコを早く突きたてたい事もね…」お互いの体を交換したもの同士はセックスの時、探り合いをしなくていい…

「でもあなたは時間をかけてゆっくりと感じたい…でしょ？」

「はい…」

この身体に入ってから性的な興味が男にも広がったみたいです。

ただ、心は女性に興味がある…半々ですね…」

「私も…」

ただ、肉体的に男は欲が強いみたい、好みの対象が女性の方が強い
の……

ねえ、続けましょ…

もっ…、おしゃべりは要らないわ……」

私は自分の体の性感帯にキスの雨を降らせた

一方的に夢中になって私の躰を味わい尽くす…

暫くして、達くんが起き上がり

「僕にもさせて下さい…」

とベッドまで私の手を引いて座り、私を自分の正面に立たせた

「む、無理しないで… あっ」

達くんはちゅうちょせず、自分のだったモノをくわえた…

「ねっねえ… 大… 丈夫な、の？」

私の腰元の位置で潤った上目使いで応える…

うつ…、これね… 元彼が言ってたのわ…

何かスッゴい狂るわ… 違った、来るわ…

達くんは舌も使いながら頭を前後に動かす…

ジユプツ、ジユプツ、ジユプツ…

あっ、もっ、もう… ダメ

……

「あっ…、」

達くんは眉間にしわを寄せたが…

「コクツ、コクツ…」と私が出したものを飲み干した…

「ごめんね…」

「につ、苦いんですね…
初めて知りました…」

私は彼を愛おしく思った…

私は彼をベッドに沈め、最後までじらしながら責めていた部分に唇を寄せた…

達くんは慌てて

「あつ、そんなとこ舐めちゃ！…あつ…！
んんんっ！…！！」

達くんは身悶えながら、私の頭に手をあてがい掻き乱す…

私は一番敏感な部分を唇内で転がした…

「ん”っ、ん”ーっ！…！！！！」

達くんは必死に声を抑えている。

「達くん…女なんだもの、

自由に声を出していいのよ？」私はパン生地にもスクレーパーでつけた切れ込みのようなクレバスに舌を差し入れた…

クレバスはすんなり私の舌を迎え入れた
舌を使って肉体の芯を責める…

「もう、ダメ！
ガマン出来ない！
ください！！！！
中に下さい！！！！」

私は唇を引き上げ、一度達くんの頬にキスしてから…

「あなたの童貞…
変わりに私がさせてもらっわ…」

「あっ………！
あっ！あっ！あっ！あっ………！」

もう達くんは声を抑えたりしない…
初めてオンナのヨロコビを感じて鳴き続ける達くん…

「あっ！もうっ！
だめっ！いっちゃうっ！うっっ！う………！」

「はあっ、はあっ、はあっ、私もっ、もうイク！………！！」
私がいくのと同時に達くんは一瞬臍全身を硬直させ、融解した後、
更に臍全身を腰元を震源にビクビクツと痙攣した後ガクつと体をベ
ッドに沈めた……
私達はふたりの余韻に浸ってベッドに横たわっていた…

達くんはボーっと天井を眺めている、

焦点は会ってないどうやら失神しちゃったみたい…

その顔を眺めていた私はさっきの話をもう一度聞いてみた…

「ねえ…私と一緒にいてくれない…？」

達くんはゆっくり振り返ってこう答えた…

「…妊娠したら責任とってくださいね…」

私は

「もちろん、」と答えた…

襖（前書き）

襖が大変な事になる次話への話し…

襖

奇妙な共同生活が始まった

とりあえずは何とか暮らしている…

って言うのはウソで終始個人生活統括局

の人が来てやっと落ち着いたのが、あれから3日後だった
さすがに二人では手狭なので
新しい部屋を探し、やっと引っ越しを完了し、一休み中…

「あらかた片づいたねー」

「そうですね、とりあえずはこれで生活は出来ますね。」とりあえず部屋振り分け型2DKと言えば聞こえは良いが、部屋は襖で繋がっていて、部屋を見た結衣さんの第一声、

「夜が楽しみね…」

からかつてる？

からかつてるよね？僕の事？

とりあえず僕は襖をベッドで塞ぎ、部屋の配置を即席に整えた。

しかし、ベッドで塞いだ意味の無い事がその夜に分かることは知るよしも無かった…

その夜、流一と小夜さんが遊びに来た。

引っ越し祝に流一は大吟醸を持ってきて

小夜さんは清楚な出で立ちで現れたが、引っ越し祝に『フランス人の帽子』と書いた袋を出した瞬間、

「あんたはそんなナリして何を持ってくんの!？」と頭を叩かれた
とりあえず、色々間違いのある引っ越し祝だったが、いざ、始めようとした時…

ピンポン

と呼び鈴が成ったので

僕は飲みかけたグラスを戻して席を立った。

「個人生活管理局からお届け者です」

と受け取ったのは、やたらでかい寿司桶だった…

とりあえず、

「こんなん着た…」

とだけ言ってテーブルに持って行った。

寿司桶を置いた途端テーブルは役目が果たせるスペースが1/3に成った…

兎に角、その日はかなり盛り上がったが、

夜、怖い思いをしたのはあの『襖』の事である…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3751f/>

Mistake!

2010年10月9日12時39分発行